

第2章 ホイアンでの家屋修復

林 良彦

1990年にベトナムホイアン史跡保存国家委員会（ブートゥエンホアン委員長）から日本・文化庁にあった支援の要請に基づく、1991年から始まった港町ホイアンに残る歴史的町並みの保存に関する日越協同事業には日本側から建築計画、建築歴史、考古学、歴史調査等の専門家が参加して、それぞれの分野で成果を出している。

このうち、日本・文化庁が関わったベトナム・ホイアンにおける家屋修復協力事業は1993年9月から取り組んできたが、現在までに以下の4件8棟が修復を完了している。この間、日本における文化財修理の専門家として、滋賀県、奈良県、和歌山県文化財センター、文化財建造物保存修復技術協会の建造物文化財修理技術者、日本建築セミナーの建築専門家、昭和女子大学を中心とする大学の建築研究者が工事に携わり、ベトナム側からは地元のホイアン遺跡管理事務所、ハノイの修復センターのメンバー等が参加した。

家屋修復協力事業は、単に日本側がホイアンの歴史的建造物を日本側が修復するというだけでなく、長い歴史を有する日本側の木造文化財建造物修復に関する技術の蓄積をベトナム建築に適用できるかを検証し、修復を通じて修復の理念や技術の点で地元ホイアンのスタッフが修得するものがあればこれを伝え、最終的には地元スタッフで歴史的町並みの本格的な修復工事ができることを目指している。実際、修復工事現場は技術者にとって技術を習得し深めるためには一番大事な場所であり、現場なくして技術協力があり得ないことは事実である。ホイアンの修復現場ではハノイの修復センターの修理技術者や現地の歴史や考古学の専門スタッフの参加があり、それなりにお互いの意見を集約しながら事業を進める場面はあったものの、主として事業開始以降のベトナムの社会的変化が原因であると考えられるが、建築の専門教育を受けた地元スタッフがこの協力事業に参加していないことから、修復工事を通じて技術交流を行なうという日本側の当初の目的は達成されないまま、計画の一応の最終年次である2002年を迎えつつあることは残念である。今後の活動の中心はホイアンからベトナム各地の民家修復に移って行くことが予想されるが、事業の目的は不変であることをここで確認しておきたい。

1. 1993年～1994年

チャンフー80番 橋家、後家、前家

ホイアンの歴史的町並みの中央にある二階建町家の修理工事を行なった。93年度は小規模な橋家の解体修理を行なった。この家を工事対象に選定したのは、比較的小規模なものから始めて日本側スタッフがベトナム建築の技法に慣

れようという意図からで、加えて橋家部分はひどく破損していたので修理によって機能が回復する効果が高いことも理由となった。これに引き続き94年度に後家の半解体修理、前家の屋根葺替部分修理を行ない、ひとまとまりの町家として修理を完了した。現在、貿易陶磁博物館として活用されている。建築年代は旧居住者の記憶にある1920年代と考えられ、当初年代指標が全くなく、様式からは不明であったホイアン町家の建築年代の一端が明らかになった。

2. 1994～1995年

チャンフー121番 前家のみ

比較的建築年代が古いグループに属する平屋建町家の解体修理。建築年代は不明であるが18世紀後半から19世紀と思われる。前家の背後には橋家、後家があったと考えられるが、すでに新しいものに建て替えられている。屋根が大破し、崩壊の危機にあったので、94年度は緊急に部材の解体を行ない、とりあえず町並み景観を考えて平屋の町家を模した板塀で囲った。95年度に旧部材の繕い、補足木材の加工、建て上げを行なった。この修理では東隣町家の煉瓦造境界壁が内側に傾いていたため、鉄筋コンクリートの擁壁を打ち足し、木造柱が管状に腐朽していたので一旦裁ち割り、内部の腐朽している部分に新材を入れて日本から持ち込んだエポキシ系接着剤で接着を行なう修理を行なった。地元で手に入る以外の材料を使うことについて問題があることは承知していたが、長年の放置による腐朽破損が激しく部材の取替を最小とするためには選択の余地がなかった。現在は、以前からの家業である醤油商とTシャツなどを売る土産物屋として活用されている。

3. 1995年

チャンフー142番 前家のみ

チャンフー121番の向かい側にある平屋建町家の解体修理。建築年代は121番よりもやや新しいと考えられる。初めての政府所有以外の家の修理を行なった。ホイアンの町家の前面はフランス統治時代の道路拡幅によって切り取られているものが多いが、この家も切り取られて、修理前は仮の煉瓦壁のファサードに変更されていた。煉瓦壁を撤去して伝統的な木造のファサードの復旧を行ない、切り取られて軒が上方に上がっていた正面の鴨居上部分には別の町家類例に倣って腕木庇を取り付けた。正面に木造の間仕切壁があった痕跡はあるが、復旧ファサードのデザインについての根拠はない。このような復旧については賛否両論があると思われるが、修復前のファサードはあまりに平板で、

木造のファサードが続く町並み景観にはそぐわないものであったこと、また内部に伝統的な架橋があることを想起させないものであったことから、敢えて想像に基づく復旧を行なった。現在は家具を作る工房兼店として活用されている。

4. 1996年～1997年

チャンフー48番 前家、橋家、後家

福建会館の入口西側にある平屋建町家。後家の半解体修理、その他を解体修理した。建築年代は18世紀後期から19世紀前期と見られる。前面は道路拡張で切り取られているが、吹き出しの前面庇の出を小さくし前面の扉構えは当初のままである。修理工事では庇の出を現在の道路境界から出ない範囲で復旧した。また、それまでの修理工事では痕跡が整合しなかったり、また、工事後の活用に関する要請からそれまで復原を見送ってきた痕跡に基づく床の復旧を行なった。これはこの家には他では一般的な転用材が含まれていなかったことから痕跡が読みやすく、確実な復原が自信を持ってできたことによる。この家は材料が木太く、彫刻等も完備していてホイアンの町家の中でもっとも優れたものと位置付けられる。また、修理工事自体も日本側技術者がベトナム民家に慣れていたこと、ベトナム人大工が日本の修理の仕方に精通したことにより、それ以前の修理よりも一層出来映えが良いと自負している。現在は工事前と同じく住宅として使用している。

5. 1998年

来遠橋の破損調査

チャンフー通りとグエンチミンカイ通りを繋ぐ来遠橋の修理については、同橋が日本橋と呼び慣わされていることもあって、修理について特にホイアンソサエティから文化庁に技術協力の要請があった。これに基づき現状の破損調査と修理計画の立案を目指した。来遠橋は屋根付きの橋で、背後に仏堂が取り付く。建築年代は19世紀前期と考えられるが、その後何回も改造を受けている。上部の木造の部分については他の町家と同様雨漏による腐朽破損を受けていて、橋と堂の部分が別々の方向に傾いていることがわかった。

このほか、ホイアン旧市街の東西を繋ぐ道路上にあり、近辺には代替の橋がないという交通上の重要性から、特に橋脚の安全性の調査については日本側からは土木工学の専門家が参加したが、橋脚が不同沈下を起こし傾いていることや、橋脚の建つ地盤が非常に軟弱で、地業のやり直しを要することなどが明らかになった。日本側調査の結論としてはこの橋は一旦解体して地盤の強化を行なわなければ実用の橋としては危険であるということである。